

(9月29日)「コリントの信徒への手紙一 12:27~31」

皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。

(コリントの信徒への手紙一 12章 29節)

・パウロは改めて、教会を体と肢体にたとえます。そしてここでは、その部分によって一人一人はキリストの体を形作っているとも書きます。この考え方は、わたしたちに新しい気づきを与えてくれます。

・わたしたちは教会の一員として奉仕をしている意識はあると思います。しかしそれだけではなく、わたしたちはキリストという体の一部なのです。というよりイエス様が、わたしたちを自らの体に組み込んでくださっているということでしょう。

・そしてわたしたちは与えられた賜物によって、それぞれの働きをおこないます。隣の人と同じことなどできなくていい。また陰で支える人も必要です。みんな違って、みんないいのです。

(9月30日)「コリントの信徒への手紙一 13:1~7」

たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

(コリントの信徒への手紙一 13章 2節)

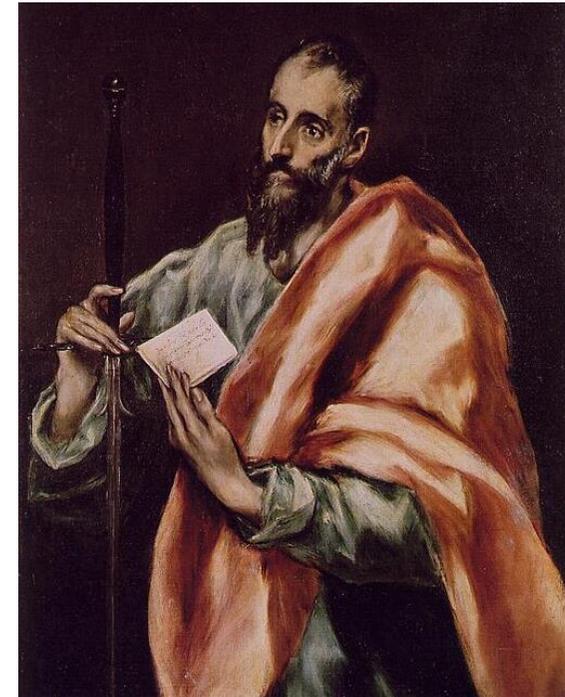
・ここでパウロは、愛について語りだします。この箇所は結婚式でも読まれることが多く、「愛の賛歌」と呼ばれることもあります。パウロはこの手紙でコリントの人たちに、分裂せずに一致するように勧めてきました。

・そしてそのためには、愛が重要であることを伝えます。4節から6節に書かれている「忍耐強い」、「情け深い」、「ねたまない」、「自慢せず高ぶらない」といった言葉を聞くと、なかなかそうなれない自分にも気づかされます。

・教会が分裂するとき、その根底にはお互いがお互いを大切にせず、自分の言いたいことを主張し続ける実態があると思います。そのようなことでは教会やわたしたちは、キリストの体にはなれないのではないのでしょうか。

## コリントの信徒への手紙一 通 読

9月



(9月 1日)「コリントの信徒への手紙一 6:1~8」

**あなたがたを恥じ入らせるために、わたしは言っています。あなたがたの中には、兄弟を仲裁できるような知恵のある者が、一人もいないのですか。**

(コリントの信徒への手紙一 6章 5節)

- ・コリントの教会内で信徒同士の財産問題などが生じたときに、彼らは教会の外の公的な裁判で処理をしていました。パウロはそうではなく、自分たちの仲間内で解決するようにしなさいと言います。
- ・外部監査や第三者委員会という言葉が当たり前になったわたしたちからすると、パウロの言葉は時代錯誤のように聞こえます。教会内で起こった問題をもみ消すように指示しているとも感じられます。
- ・しかし、パウロが言いたかったのはそこではありません。神さまに集められた共同体の中での裁きは、最終的に神さまに委ねられるということです。ただ現代の教会は、やはり外部の目に見てもらふ必要はあると思います。

(9月 2日)「コリントの信徒への手紙一 6:9~11」

**あなたがたの中にはそのような者もいました。しかし、主イエス・キリストの名とわたしたちの神の霊によって洗われ、聖なる者とされ、義とされています。**

(コリントの信徒への手紙一 6章 11節)

- ・パウロはここで「悪徳表」を挙げ、「正しくない」とはどういうことなのかを具体的に示します。このような記述があると、わたしたちはまず自分に当てはまるものがないかを確認します。
- ・そして次にわたしたちがしがちなことは、「あの人はこれに当てはまっている」、「あの人はこれだから正しくない」と他人を批判する材料にしてしまうことです。しかしイエス様が「人にばかという人は、人を殺していることになる」と言われたことを思い出しましょう。
- ・わたしたちは誰一人、正しい者ではありません。しかしわたしたちは洗礼によって新しくされ、神さまの前に義とされているのです。そのことを、いつも心に覚えておきたいと思います。

(9月 27日)「コリントの信徒への手紙一 12:12~18」

**もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。**

(コリントの信徒への手紙一 12章 17節)

- ・「多様性の一致」という言葉があります。そのことをあらわすのに、パウロは人間の体とその肢体を用いて表現します。ローマの信徒への手紙 12章にも同じようなことが書かれています。
- ・コリントに限らず、教会の中でも優劣が語られたり、違いによって排除されたりすることがあります。ここではいわゆる「弱い人」が「強い人」に対して語っている内容のようです。
- ・「わたしには賜物がないから」、「わたしはあの人のように信仰深くないから」、そのような考えはないでしょうか。教会はそうではなく、すべての人、多くの部分から成り立っています。そしてどこかが欠けても、いけないのです。

(9月 28日)「コリントの信徒への手紙一 12:19~26」

**一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。**

(コリントの信徒への手紙一 12章 26節)

- ・教会の中で優劣を決めたがるのは、人間的な思いが原因です。コリントの教会では霊的な賜物を「得ている」と思い込んでいる人が自分を誇り、他の人たちを自分より下に見ていました。
- ・そのような人たちが、「お前はいらぬ」、「あなたは教会の役に立っていない」と蔑み、否定していたのです。しかしパウロは、人から見て弱く見える部分ほど、必要なだと語ります。
- ・そしてお互いに配慮しあうときに、「共に喜び、共に泣く」という共感が生まれていくのです。わたしたちの教会ではどうでしょうか。共に喜んでいきますか。苦しみを一緒に抱えていますか。

(9月 25日)「コリントの信徒への手紙一 12:1~3」

あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。

(コリントの信徒への手紙一 12章 2節)

- ・パウロは続いて、「霊的な賜物」について触れます。おそらくこのことも、コリントの教会から質問されていたことでしょう。「霊」や「聖霊」は目に見えないので、なかなか理解が難しいところです。
- ・コリントは港町で、様々な文化が交差する場所でした。そのためコリントの教会の人たちも、以前は異教徒として偶像を拝んでいました。そのときのことを、「悪霊の力によって」連れていかれたと解釈していたかもしれません。
- ・コリントの人たちは、「霊の力」については受け入れていたようです。しかし霊的熱狂に傾いてしまっている人たちもいました。パウロはそのことも踏まえ、「霊的賜物」について伝えていきます。

(9月 26日)「コリントの信徒への手紙一 12:4~11」

これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

(コリントの信徒への手紙一 12章 11節)

- ・パウロは、賜物は霊、務めは主(イエス)が与え、働きは神がなさると書きます。父・子・聖霊がわたしたちに様々な形で関わっているということを伝えたいのでしょう。ただし三位一体の教理はここではまだ確立していません。
- ・さてパウロは、霊が与える賜物について語ります。知恵の言葉や知識の言葉、信仰や病気をいやす力、奇跡をおこなう力や預言する力などなど、様々な力(賜物)がそれぞれの人にに応じて与えられるというのです。
- ・コリントの人たちは、そのような賜物は特別な人にだけ与えられると思っていました。わたしたちも同じように思っているかもしれません。しかし霊は、望むままにそれを一人一人に分け与えられるのです。

(9月 3日)「コリントの信徒への手紙一 6:12~20」

知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

(コリントの信徒への手紙一 6章 19節)

- ・5章からここまでパウロは、「みだらな行い」について論じてきました。それはコリントの人たちやパウロの論敵たちが、このように言っていたからです。「わたしには、すべてのことが許されている」と。
- ・イエス様の十字架により、すべての罪が赦され自由となった。そのように人々は理解しました。ただその結果、「みだらな行い」をしてもかまわないという、間違った方向へと進んでいったのです。
- ・わたしたちの身体は、聖霊が宿る神殿なのだとパウロは書きます。わたしたちの思いではなく、神さまのみ心のためにわたしたちの身体を用いることができれば、どれほど素晴らしいことでしょうか。

(9月 4日)「コリントの信徒への手紙一 7:1~7」

わたしとしては、皆がわたしのように独りでいてほしい。しかし、人はそれぞれ神から賜物をいただいているのですから、人によって生き方が違います。

(コリントの信徒への手紙一 7章 7節)

- ・ここからパウロは、コリントの信徒から出た質問について答えていきます。ただしこれはパウロの牧会的配慮の中から書かれた答えであって、絶対的な真理ではないことにも注意が必要です。
- ・コリントの教会の中には、禁欲を重んじそれを尊ぶグループと、すべてのことが許されているからと性的放縦に走るグループとがあったようです。その両者が互いに反目し合い、パウロに助言を求めてきたのでしょう。
- ・パウロの答えをそのまま現代のわたしたちが読むと、首をひねってしまう表現も出てきます。しかしここでパウロが言いたいのは、「人によって生き方が違います」ということです。わたしたちもそれぞれの生き方を尊重していきたいものです。

(9月 5日)「コリントの信徒への手紙一 7:8~11」

しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましだからです。

(コリントの信徒への手紙一 7章 9節)

- ・昨日の箇所でも書いたように、この結婚や離婚についての言葉はあくまでもパウロの個人的な思いです。この文言を盾に、「このように書いてあるからこれに従いなさい」というのはかなり乱暴です。
- ・聖書が書かれた時代の社会状況と、今とは大きく違います。DVなどによって離婚を考えている人に対して、「いや、聖書には『妻は夫と別れてはいけない』、『夫は妻を離縁してはいけない』と書いてある」と言ったら、どれだけその人を傷つけるのでしょうか。
- ・イエス様は律法に書かれたことだけを忠実に守ろうとするファリサイ派とは違い、目の前にいる人を「生かす」にはどうしたらよいかを最優先されました。わたしたちも聖書の言葉だけを絶対視せず、人を生かすものとして読んでいきたいと思えます。

(9月 6日)「コリントの信徒への手紙一 7:12~16」

妻よ、あなたは夫を救えるかどうか、どうして分かるのか。夫よ、あなたは妻を救えるかどうか、どうして分かるのか。

(コリントの信徒への手紙一 7章 16節)

- ・教会には、いろんな信徒さんがおられます。○代目の信徒さん、家族全員が信徒さんという場合もあれば、家族の中で自分一人が信徒だという方もおられます。配偶者は信徒ではないという方も、結構おられます。
- ・その方々にとって、14節の言葉は福音となることでしょうか。自分を通して妻や夫も聖なる者となる、つまり神さまが関わってくださるというのですから。そして、さらなる広がりにも期待します。
- ・父母も、兄弟も、近所の人も、会社の人も、学校の友達もみんな、自分を通して神さまが関わって下さったらどうでしょうか。すべての人が聖なる者とされ、神さまの元に歩いていく。そのような世界をきっと神さまも望んでおられるのです。

(9月 23日)「コリントの信徒への手紙一 11:23~26」

だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

(コリントの信徒への手紙一 11章 26節)

- ・今日の箇所を読んだときに、「あれ？聞き覚えがあるぞ」と感じた人は多いと思います。聖公会の聖餐式の感謝聖別の中では、今日の言葉が司祭によっていつも唱えられているからです。
- ・パウロは混乱の中にあるコリントの教会の人たちに、イエス様が定められた「主の晩餐」に立ち返るように求めます。この晩餐は単なる食事ではなく、福音書にも記されているものであり、イエス様が「このように行いなさい」と言われたことなのです。
- ・24節に「これを裂き」という言葉が出てきます。聖餐式の中で司祭は、このときに大きなウエハースを裂きます。それはイエス様がわたしたちのために裂かれ、死に引き渡されたしるしです。わたしたちはその死を礼拝の中で、いつも想起していくのです。

(9月 24日)「コリントの信徒への手紙一 11:27~34」

主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。

(コリントの信徒への手紙一 11章 29節)

- ・聖公会の祈禱書には、162頁から聖餐式の式文が書かれています。その直前の160~161頁には、「このような人は陪餐してはならない・させてはならない」ということが書かれています。今日の箇所の、「ふさわしくないままで」という言葉が思い起こされます。
- ・聖餐式で陪餐を受ける前に、わたしたちは何を祈るべきでしょうか。「思いと、言葉と、行いによって」罪を犯し続ける自分の姿を顧み、心から悔いる。そのことが大切なのではないのでしょうか。
- ・そして主の食卓を、互いに喜びながら守っていきたいと思えます。わたしたちが陪餐に与るのはいのちをいただくためです。決して裁かれるために、集まっているわけではありません。そのことを心に留めたいと思えます。

(9月 21日)「コリントの信徒への手紙一 11:7~16」

いづれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。

(コリントの信徒への手紙一 11章 11節)

- ・当時の社会の中では女性は弱い存在とされ、男性によって守られるべきものだと考えられていました。そこで女性は男性から力をいただいているしるしとして、かぶりものをしていました。
- ・コリントのある人たちは、「そんなことしなくても神さまが守ってくれる」と考え、女性がかぶりものをするのをやめさせました。しかしそのことによって混乱が生じたため、パウロは女性にかぶりものをするように命じます。
- ・その理由を知ると、とても滑稽なことをしているように感じます。しかし「何かが変わっていく」過程で、信仰の弱い人がつまずいてしまわないように、コリントの人たちに配慮するようにとパウロは求めるのです。

(9月 22日)「コリントの信徒への手紙一 11:17~22」

なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。

(コリントの信徒への手紙一 11章 21節)

- ・ここからパウロは、本質的な問題に入っていきます。そのテーマは「主の晩餐」です。ただし今日の箇所で取り上げられているのはわたしたちが知る「聖餐式」ではなく、日ごとの食事のようです。
- ・コリントの人たちは週日(平日のこと)の夕方にも集まって、一緒に食事をしていました。そしてそのときには、各自で自分の分を持ち寄って飲み食いをしていましたと考えられています。
- ・しかしそのときに、「仲間割れ」が生じたようです。教会でも「気の合う仲間」で固まってしまい、周りの人に気を配ることの出来ない状態が見られることがあります。イエス様は、「みんなで食卓を囲む」ことを求められています。

(9月 7日)「コリントの信徒への手紙一 7:17~24」

おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい。これは、すべての教会でわたしが命じていることです。

(コリントの信徒への手紙一 7章 17節)

- ・「現状のままでいる」、今日の箇所をそのポイントで読んでしまうと、向上心もなく改革することもなく、与えられた環境の中でそのまま過ごすことが良いことのように思えてしまいます。
- ・この手紙が書かれたころ、すぐにでもイエス様が再臨され、世界は終末へとすすんでいくと考えられていました。その中で、「そのままとどまりなさい」というパウロの言葉は語られたのです。
- ・パウロが手紙を書いた時代とは、終末への期待などがかなり変わっていることに注意したいと思います。しかし同時に、神さまの前では自分を無理に変える必要がないということは、押さえておきたいと思います。

(9月 8日)「コリントの信徒への手紙一 7:25~35」

このようにわたしが言うのは、あなたがたのためを思っていることで、決してあなたがたを束縛するためではなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。

(コリントの信徒への手紙一 7章 35節)

- ・パウロの結婚観を簡単にまとめると、「結婚すると苦勞する」ということになりそうです。神さまに集中するためには、妻の存在は足かせになるということでしょうか。ただしこれは、この手紙を書いた時期が「危機が迫っている状態」だから言えることです。
- ・結婚する自由も、結婚しない自由も、わたしたちには与えられています。結婚しているからといって、誰もが皆、心が二つに分かれてしまうわけではないでしょう。結婚していても、神さまに心を向けることはできると思います。
- ・カトリック教会では、聖職者が妻帯することは一般的には認められていません。このパウロの考え方が根底にあるのではないかと推察します。しかし一方、初代教皇のペトロにはしゅうとめがいた、つまり妻がいたという事実もあるわけです。

(9月 9日)「コリントの信徒への手紙一 7:36~40」

しかし、わたしの考えによれば、そのままにいる方がずっと幸福です。わたしも神の霊を受けていると思います。(コリントの信徒への手紙一 7章 40節)

・パウロがこれほどしつこく結婚について書いているところを見ると、コリントの人たちにとってこのことは大きな問題であったようです。独身のパウロにとって、なぜみんなわざわざ結婚するのか、不思議だったのかもしれませんが。

・パウロは改めて、「結婚しない人の方がもっとよい」という自身の見解を述べます。しかし読者の中には、違和感を覚えた人も多くいたことでしょう。わたしたちの間でもそうだと思います。

・結婚がいつも、神さまから人を引き離すものではないことをわたしたちは良く知っています。それどころか、結婚によって神さまを知り、イエス様を受け入れた人もいます。それぞれに与えられた生き方があるのです。

(9月 10日)「コリントの信徒への手紙一 8:1~6」

そこで、偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています。(コリントの信徒への手紙一 8章 4節)

・次にパウロは、「偶像に供えられた肉」を食べて良いかについて言及します。コリントには異教の神々が崇められ、その神殿には犠牲の動物がささげられていました。その肉はまず、神殿祭司が自分たちの物として取り分けていました。

・その残りが市場などに出回るのですが、一度他の神々にささげられたものは避けなければいけないとユダヤの人たちは考えていたようです。キリスト教の信徒の家に地蔵盆のお下がりが届けられたらどうするか、そういうことでしょうか。

・コリントの一部の人たちは、偶像自体に意味がないのでそのような肉は何の恐れもなく食べられると考えていました。しかしその「強い人」は、食べることでできない「弱い人」を見下してしまいます。パウロはそのことを、指摘していきます。

(9月 19日)「コリントの信徒への手紙一 10:23~33」

ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、あなたがたは人を惑わす原因にならないようにしなさい。

(コリントの信徒への手紙一 10章 32節)

・パウロは偶像に供えられた肉について、「食べなさい」と言ったり「食べるな」と言ったり、一貫していないようにも感じます。しかしよく読むと、「神殿では食べるな」、「市場で買ったものは食べなさい」ということのように。

・24節に「自分の利益ではなく他人の利益を追い求めなさい」とあるように、わたしたちは与えられた自由を自分のためではなく、目の前の人のために用いるようにと促されています。

・わたしたちが生きるのは、他人を惑わすためではなく喜ばすためののだとパウロは書きます。コリントの人たちが自分を誇り他人を見下していたように、わたしたちもなっていないか、考える必要があるのでしょうか。

(9月 20日)「コリントの信徒への手紙一 11:1~6」

ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。

(コリントの信徒への手紙一 11章 3節)

・パウロは手紙の中で、「男・夫」、「女・妻」という言い方をすることがあります。「妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい」というエフェソの信徒への手紙 5章 21節~などは結婚式でも読まれることがありますが、今の時代的にはどうかという箇所です。

・カトリック教会などでは、ベールをかぶった女性の姿を見ることがあります。また男性が帽子をかぶって礼拝堂に入ったら、脱ぐように促されることがあります。この箇所が元になった伝統かもしれません。

・ただ、「男性だから」、「女性だから」という言葉は、当時の時代背景や社会状況が大きく影響していることを覚えておきたいと思います。聖書はそれぞれの時代や文脈で解釈し続ける必要がある書物なのです。

(9月 17日)「コリントの信徒への手紙一 10:7~13」

これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。

(コリントの信徒への手紙一 10章 11節)

・パウロはここで、出エジプトの際に滅ぼされたイスラエルの人々について言及します。彼らは偶像を礼拝し、みだらなことをし、神さまを試み、不平を言い続けました。そのため滅んでしまったのです。

・ここで覚えておきたいのは、昨日の箇所で触れたように彼らの出エジプトの出来事は「洗礼と聖餐の予型」だということです。しかし「洗礼と聖餐」に与ったとしても、神さまの怒りを逃れることはできなかったのです。

・コリントの人たちは、自分たちはすでに洗礼と聖餐の恵みの中にいるのだからもう安心だと考えていました。そして放縦な生活をしていましたが、その先には滅びが待っているということをパウロは伝えるのです。

(9月 18日)「コリントの信徒への手紙一 10:14~22」

パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。

(コリントの信徒への手紙一 10章 17節)

・「偶像礼拝」と聞くと、何を思い浮かべるでしょうか。キリスト教の教派によっては他宗教のお葬式に出席するのを禁じたり、初詣に行くこともダメだと教えたりするところもあります。

・ただわたしたちがあまりにも排他的にこの言葉を捉えてしまい、周りの人たちを避けて歩むのであれば、それは神さまのみ心とは違うように思います。イエス様は罪人や徴税人と一緒に食事をしました。

・イエス様は、人々が排除している人たちから自分の身を「避ける」のではなく、共に歩まれました。パンを皆で共に食べるために、わたしたちはこの地に遣わされています。「避ける」のではなく「受け入れる」、そのことができればと思います。

(9月 11日)「コリントの信徒への手紙一 8:7~13」

ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。

(コリントの信徒への手紙一 8章 9節)

・昨日の箇所に書かれていた「偶像に供えられた肉」に関して、パウロは続けます。そのような肉を食べたからといって汚れることなどないと確信できる人は、「強い人」だと言えるかもしれません。

・しかし共同体の中には「そんなことして大丈夫なの？」と肉を食べるのを躊躇する人や、肉を食べたものの「こんなことしてしまった」と罪悪感にさいなまれる人も出てくるかもしれないのです。

・パウロが言いたいのは、そのような「弱い人」を傷つけてはならないということです。教会にもいろんな人がいます。「このようなことは当たり前」という思いで周りの人を追い詰めることは避けていきましょう。

(9月 12日)「コリントの信徒への手紙一 9:1~10」

あるいは、わたしとバルナバだけには、生活の資を得るための仕事をしなくてもよいという権利がないのですか。

(コリントの信徒への手紙一 9章 6節)

・パウロやバルナバは異邦人伝道をしていました。それに対してイエス様の兄弟ヤコブやケファ（ペトロ）はエルサレム教会で働いていました。エルサレム教会では、「使徒」の働きを金銭的に信者が支えていたようです。

・しかしパウロは、自分も使徒であるにもかかわらず、そのような援助がないことを不満に思っていたようです。ただパウロが使徒であるということすら、疑問を持たれていたようですが。

・「牧師も自分で稼いだらどうだ」と主張する声を聞くことがあります。現在の教会では、幼稚園の園長や学校のチャプレンを兼務することも多くあります。しかし本来は、いつも神さまと地域の人たちに心を傾けることが必要なのかもしれません。

(9月13日)「コリントの信徒への手紙一 9:11~18」

同じように、主は、福音を宣べ伝える人たちには福音によって生活の資を得るようと、指示されました。(コリントの信徒への手紙一 9章14節)

- ・パウロはテント職人として、収入を得ていました。昨日の箇所では、「なんで自分も使徒なのに、みんなは金銭的に支えてくれないの？」と文句たらたらのようにも思いましたが、今日は違います。
- ・「こう書いたのは、自分もその権利を利用したいからではない。それくらいなら、死んだ方がましです」とパウロは書きます。もしも「わたしたちの献金をあなたの伝道に用いて下さい」と言われても、「いや、いらぬ」と断ることでしょう。
- ・だからすべての伝道者は、教会からの補助を受けずにやりなさいというわけでは決してありません。「弱い者に配慮しなさい」とコリントの人たちに言っておいてこう宣言するパウロは、正直矛盾しているように思います。

(9月14日)「コリントの信徒への手紙一 9:19~23」

弱い人に対しては、弱い人になりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。

(コリントの信徒への手紙一 9章22節)

- ・「郷に入っては郷に従え」という言葉があります。わたしが最初に遣わされた教会の横には、地域で一番大きな神社がありました。町内会の行事の中には、宗教的なものも多くありました。
- ・しかしそこで町内会長もさせていただき、地域の方々ともかなり親しくなりました。キリスト教の救いに導くことがなかったとしても、とても意義のある時間でした。現在勤務している奈良でも、積極的に他宗教の人との交流に出かけています。
- ・「すべての人に対してすべてのものになる」、自己主張を捨てて相手に合わせることに、疑問を持つ方もおられるかもしれませんが、しかしそれこそが、神さまの愛につながる行為なのです。

(9月15日)「コリントの信徒への手紙一 9:24~27」

あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。

(コリントの信徒への手紙一 9章24節)

- ・パウロはフィリピの信徒への手紙3章14節でも、「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることで」と書いています。
- ・「賞」や「競争」という言葉をパウロは好んで用いますが、わたしたちの信仰理解とは少し違うのかもしれませんが。「自分だけ特別に頑張った」から「神さまに認められる」というのはどうも、自己満足な気がします。
- ・それよりもゆっくりお祈りする人にスピードを合わせたり、礼拝が始まるギリギリの時間に階段を上っている人と歩調を合わせたりする。一人だけで賞を受けるよりも、大切なことのように思います。

(9月16日)「コリントの信徒への手紙一 10:1~6」

しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒れ野で滅ぼされてしまいました。

(コリントの信徒への手紙一 10章5節)

- ・この10章で、パウロは偶像への礼拝について語ります。そしてその冒頭には、「わたしたちの先祖」について書きます。モーセという名があるように、パウロは出エジプトの出来事について触れていきます。
- ・イスラエルの人々は、荒れ野で40年間さまよいました。その間、昼は雲の柱、夜は火の柱によって導かれます。また紅海がさけ、その中を彼らは歩きました。そのことをパウロは、「洗礼の予型」だと言います。
- ・また天からのパンであるマナと岩から出る水によって養われたことを、「聖餐の予型」だと言います。しかしそのイスラエルの民のほとんどは、荒れ野で滅ぼされてしまいます。そのこととコリントの人たちがどう関係するのか、明日以降語られます。